

キンモクセイ



(撮影：桐原真希)

西原にて

■ある日突然自己主張

キンモクセイの枝葉は、これと言った個性的なものではなく、花が咲くまでその姿が目につくことは殆どないかもしれません。それが、9月下旬から10月上旬にかけて、ある日突然、スイッチが入ったかのように、オレンジ色の小さな可愛い花を大量に咲かせます。その香の思い出を、多くの方が新聞投稿やブログなどで綴っています。私を含めたある程度の世代のみなさんは、トイレの芳香剤の香としてのイメージも強く、花と同じ色をした丸いビーズの商品が思い出されます。毎年、ほぼ同じような時期に存在をあらわにするこの花は、年によって2度咲くこともあるそうです。年々開花が遅くなっているのでは、という情報もあり、初認目を意識したい花の一つです。

■可愛いさたっぷりだけど雄

花の雰囲気と醸し出される香が、どことなく女の子を想像させますが、実は、日本で生育しているキンモクセイは全て男の子なのです。イチョウと同じように、雌雄異株の木ですが、日本ではその実を見ること

はなかなか出来ません。もともと中国大陸南部に自生し、日本には江戸時代に持ち込まれました。今では観賞用の庭木としてもすっかり定着しています。中国では花を白ワインに浸した桂花陳酒というのがあり、お茶にも混ぜるとありましたので、いつか試して味わってみたいものです。

■意外と長生きシンボルツリー

キンモクセイは、良好な条件下でとかなり長生きします。全国各地に樹齢四百年から五百年の老木もあり、市町村の木に指定している自治体の数は15にものぼります。ただし、大気汚染には敏感なようで、排ガスなどが酷いところでは、花をつけにくくなるそうです。西原地区の民家の庭先から見えたオレンジの花は、色も香も申し分なく、南部町の空気の良さも証明しているようでした。撮影日は今年の10月6日。さて、今年はいつスイッチがはいるのか、お近くのキンモクセイに気付いたら、日付を手帳やノートに記録してみませんか？

自然観察指導員 桐原真希